

～新渡戸記念の～

## 『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

### 第2回 「医師の風貌」

国手とは「国を医する名手の意」、名医また医師の敬称とあり、「医師は 直接、間接に、国家の命運を担うと思うべし」とのことである。医師の地上的使命と同時に「日本の傷を医す者」「矢内原忠雄（1893-1961）：1945年12月23日の講演」が蘇った。政治家にして医師のセンスを兼ね備えるのは至難のことである。しかしその稀有の例が過去の日本にもいた。岩手県が生んだ後藤新平（1857-1929年）である。1882年、岐阜で暴漢に襲われ負傷した板垣退助を医師として手当し、板垣退助に「医者にしておくには惜しい。政治家になれば、かなりのものになるであろうに」と言わしめた後藤新平は実際、関東大震災後の東京復興の壮大なビジョンを描いたリーダーとして「理想郷を作りたいと願う熱い思い」を持ち「行動する人間」であったとのことである。後藤新平は、同じく岩手県が生んだ新渡戸稲造をいろいろな局面で抜擢した人物でもある。「最も必要なことは、常に志を忘れないよう心にかけて記憶することである」（新渡戸稲造）である。1860年代遣米使節団が、ニューヨークのブロードウェイを行進した。彼らの行進を見物した詩人ホイットマンは、印象を「考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目」と表現している。この風貌こそ、現代に求められる「医師の風貌」でなかろうか。

『どうぞあらゆる分野で「冷凍」気配の時代に、火を興し続けてください。』の激励を頂いた。まさに、『われ origin of fire たらん ～ がん哲学余話 ～』（to be 出版、2005年）である。